

日刊スポーツ 東大が勝った！

2021年5月23日

最後の勝利から4年、連敗64で止める 13時52分

現在の部員初の瞬間

東京6大学野球



勝利した井手監督(左)

＜東大2-0法大＞
◇第7週第2日
◇23日◇神宮

法大対東大 応援団に勝利のあいさつの後、泣きながらベンチに戻る東大ナイン(いずれも撮影・柴田隆二)



東大が、17年秋から引き分けを挟み続いていた連敗を64で止めた。9回表、法大の最後の打者を打ち取ると、東大ナインの歓喜の声が起きた。最後の勝利は4年前。今の部員は全員、初めて味わう瞬間だった。

持てる力をフルに使い、勝利をつかんだ。2回2死走者なしから死球をもらおうと、代走に阿久津怜生外野手(3年=宇都宮)。初球で二盗を決めると、2球目で松岡泰希捕手(3年=東京都市大付)が右前に先制打を放った。4回には1死一塁からエンドランを決め、一、三塁。ここで、阿久津がボテボテの投ゴロを放ち、三塁走者をかえした。今秋ドラフト候補に挙がる法大・山下輝から2点を奪い、4回で降板させた。このリードを、継投で守った。奥野雄介投手(4年=開成)が、リーグ戦初先発ながら5回2安打無失点。6回からは西山慧投手(3年=土浦一)、8回からは井沢駿介投手(3年=札幌南)が投げた。井手峻監督



(77)は就任2年目、3季目で念願の初勝利を挙げた。

東大・井沢(中央)は勝利にナインと喜び合う

東大に笑顔、泣き顔

2021年5月23日13時41分

大音主将「感動しました」井手監督「夢のよう」

法大ラストバッターの遊ゴロがファーストミットに収まると、一塁側ベンチから東大の選手たちはいっせいに飛び出した。スタンドのファンも手を突き上げて、喜びを共有した。笑っている選手。泣いている選手。放心したような顔の選手。感情が入り乱れた。

大音周平主将(4年=湘南)は「めちゃくちゃうれしくて…。他のことが何も考えられない。フワ

フワした…。ずっと勝ってなくて、感動しました。あまり言葉では言い表せません」と気持ちを吐き出した。主将として、昨年までは捕手として、チームを引っ張ってきた。最後の勝利は、自身が入学する前年の17年秋。惜しい試合はあったが、1勝が遠かった。「下級生の時から勝てると思ってやってきたら、最終学年になって、あれよあれよで(今季)最終戦」。心が折れそうになったこともあったという。それでも折れずに来られたのは「やっぱり、みんな試合の後も前を向いていた。切り替えて、課題と相手の研究をして。いつかはあると思って」。そのいつかが、やってきた。就任2年目、3季目で念願の1勝を手にした井手峻監督(77)は「夢のようです。うれしいです」とニコリ笑った。10試合で24盗塁はリーグ断トツ。他校と比べ長打がない分、機動力を伸ばした。この日は、足のある阿久津怜央外野手(3年=宇都宮)を、あえてベンチスタート。2回2死から死球をもらうと、迷わず代走で送った。阿久津は次打者の初球で二盗を決め、2球目の右前打で先制ホームを踏んだ。4回の追加点もエンドランでチャンスを広げた結果だった。敵将の法大・加藤重雄監督(65)は「大変失礼な言い方ですが、我々の世代の東大さんとは違う。6大学で互角と思っています」と率直に言った。伝え聞いた井手監督も「そうですね。私も法政には勝てなかった」と現役時を思い出していた。

東大、真骨頂で連敗ストップ

2021年5月23日 20時20分

長所の足生かすためデータ分析で導いた最善手

今季ラストゲームで東大の真骨頂が発揮された。2回2死から死球をもらうと、アメフト部から転部した阿久津が代走。開幕からスタメンだったが、あえてベンチスタート。次打者・松岡泰の初球で二盗を決め、2球目の右前打で先制ホームを踏んだ。東大初のプロ出身監督、元中日の井手峻監督(77)は「走るの得意なんだけど、なかなか塁に出ないから」。打率1割台のバットより、50メートル走6秒1の足を生かした。4回の追加点はエンドランから。ドラフト候補の法大・山下輝から機動力を絡め奪った2点を、3投手で守りきった。

東大・斎藤周学生コーチ(2021年5月8日撮影)

進化を示す数字がある。10試合で24盗塁はリーグ断トツだ。主将の大音は「なかなか長打は出ない。先の塁に進もうと」。



連日、二塁送球1秒8の強肩捕手、松岡泰を相手に本番さながらの盗塁練習を重ねた。もっとも、やみくもに盗塁を増やすのが狙いではなかった。あくまで得点を増やすには? という戦術面の見直しが出発点だった。支えたのが、斎藤周学生コーチ(4年=桜修館中教校)だ。農学部で理系の知識を生かし、自ら分析ソフトを作り上げた。過去の東大だけでなく、プロや高校といったあらゆるデータを集め、点差、場面など状況ごとの最善手を探った。「プログラミングして。勝ちたい思いがあったので、大変ではなかったです」と平然と言った。



2回裏東大2死二塁、松岡泰の右前適時打で二塁から生還する代走の阿久津(撮影・柴田隆二)

1試合平均2・2得点で、昨秋の1・4得点よりアップ。守りさえ踏ん張れば、勝機は見えるのが今の東大だ。緊急事態宣言で、1月11日から約2カ月もチーム練習ができなかった。

他大学よりハンディを負っても、その分、データ分析に費やし、下を向かなかつた。完封勝ちとは16年春、立大戦の宮台(現ヤクルト)以来。当時のような絶対的エースはいなくても勝ったが、大音は「いい試合でも勝ちきれなかった。もう1回、新しいチームとして、秋に臨めたら」。もっと、上を目指す。【古川真弥】

(C)2020, Nikkan Sports News. nikkansports.com に掲載の記事・写真・カット等の転載を禁じます。すべての著作権は日刊スポーツ新聞社に帰属します。

(黄色地紋: 林 莊祐)